音　韻（史的研究）

迫　野　虔　徳

一

今回の展望は、網羅主義ではなく、重点主義を原則とするとのことである。しかし非力のために部分をもって全体の動き、あるいは新しい動きをただしく押さえるというようなことはできそうにない。ツボを誤って、あらぬ眺望を描きだすより、網羅主義の方が、それぞれの「私の展望」への資料を提供する意味で、まだしも罪は少いかと思う。ただ一言、はじめにこのことを記しておいて、私の努力の至らなさの故にたまたま見落したもの、承知はしていながらここでは特に言及しなかったもののいくつかについて、お叱りを受けたときの、とっておきの言いわけの備えにはしておこうと思う。

音韻の史的研究のこの分野では、問題の所在を自らに反映してか、数年来だいたい似たような傾向にあるようである。上代語、清濁、アクセント、漢字音史というのがこれまでの展望でも常にその柱としてたてられてきたもので、この期もその例にもれない。ただ清濁についての論が従前に比して少なかったように思えるが、それも特に理由があってのことのようには思えない。かわりに音便について、ある程度まとまった論があった。以下、それぞれについて概観してみることにしよう。

二

中古以降に比して、上代は、なお狭義の音韻についての論議が盛んで、この期にもいくつか注目すべきものがあった。森博達「漢字音より観た上代日本語の母音組織」（『国語学』126、昭56・9）同「唐代北方音と上代日本語の母音音価」（『同志社外国文学研究』28、昭56・2）は、日本書紀の音仮名を漢字原音と対照してみると、巻1～13、巻22～23のグループ（β群）と、巻14～27のグループ（α群）とでは様相が異る。β群にくらべると、α群の仮名は、はるかに漢字原音に忠実であるという。そこで、α群の仮名によれば、上代語音韻についての論議は一層純度を高め、音価等について、より正確な推定が可能になるのではないかという。後者の論考は、それによって母音音価の推定をこころみたものである。しかるに、つい先日、平山久雄氏がこの森氏の考えかたに疑問を出された。「森博達氏の日本書紀α群原音依拠説について」（『国語学』128、昭57・3）森氏が、α群の仮名は、直接中国原音によって表記されているとするのは疑わしいという。この平山氏の論も、α・β群における

カ行の仮名のかたよった分布などについて、「表記者の文字嗜好の相違」による「偶然の現象」と解釈する余地があるのではないかというようなところは、いかにも誤解を受けそうな表現であるが、「α群もβ群も当時の日本漢字音の状況をふまえる点では同様であり、ただα群はβ群に比べて漢音という単一の字音体系に依拠しようとする志向が一層つよく、また略音仮名を避ける志向がつよい等、『倭音』に対する態度に若干の差があるのではないか」というのがその真意であるとすると、たしかにα群のすべてを文字通りの「漢字原音」（中国原音）による音訳とみるよりは穏当な見方のように思える。森氏自身の意見がそのうちに示されるであろうが、しかしともかく、α群の方が和化度のすくない、より漢字原音に近い仮名で表記されているというのは、まちがいのないところであろう。「従来、万葉仮名を考察するにあたって、それが如何なる文献に用ゐられた文字であるかをないがしろにして、一括して取扱ひ勝ちであったことは遺憾である」として、とりわけ日本書紀の仮名を称揚されたのが、大野晋氏の『上代仮名遣の研究』（昭28）であった。その書紀の仮名に、なお層別を考慮すべきであるという。研究の進展の図式として、これらは一すじにつながるものであろう。高山倫明「原音声調から観た日本書紀音仮名表記試論」（『語文研究』51、昭56・6）は、書紀音仮名の漢字原音の声調と、書紀古写本にみられる日本語アクセントを対照させてみると、一部の巻に単なる偶然とは思えない対応をみせるものがあるという。そして、その対応を高比率で示す巻が、実は、森氏が漢字原音に極めて忠実とされた先述のα群にかさなるという。この分布のかたよりは、たしかに示唆的である。これまで、上代のアクセントを直接考える手がかりがほとんど知られていなかっただけに、今後の研究の進展が期待される。森氏のα・β群区分説にとっても、またとない援軍であることはいうまでもない。その他、上代語音韻については、特殊仮名遣オ列イ列の甲・乙の対立の消滅、それぞれの一類への収束の理由を甲・乙の分布のかたより、音韻的対立をなす最小対の組の数（機能負担量）の少なさに求めて説明しようとした釘貫享「上代オ列甲・乙母音対立崩壊の一要因――機能負担量の観点から――」（『国語学』127、昭56・12）同「上代語におけるイ列甲・乙対立の弁別的機能」（『国語学研究』21、昭56・12）、ヤ行のイ、ワ行のウの音価について考えた毛利正守「万葉集ヤ・ワ行の音声――イ・ウの場合――」（『万葉』107、昭56・6）があった。後者は、ヤ行上二段のイ、ワ行下二段のウが、この母音音節を含む故に字余りをおこしているという例が一例も見出せないことに注目して、これは、語頭のi・uと音価を異にしていたためではないかという。字余りの句を「つくらない」という点をどの程度積極的に評価できるかということにかかわりそうである。

子音については、サ行頭子音をめぐっての尾崎雄二郎「円仁『在唐記』の梵音解説とサ行頭音」（『立命館文学』430・431・432、白川静博士古稀記念中国文史論叢、昭56・6）、時代はずっと下るが、同じくサ行子音をあつかった丸山徹「中世日本語のサ行子音――ロドリゲスの記述をめぐって――」（『国語学』124、昭56・3）があった。前者は、古代サ行子音を有坂氏のようにtsと考えるよりも、側面摩擦音のɬとした方がよいという説。後者は、ロドリゲス日本文典の記述を検討して、この時代のサ・ス・ソは、sとɕの中間くらいの閉鎖の弱い破擦であったろうという。有坂氏も、平安末期以降は、サ行子音

は摩擦音であったろうとされたのであるが、亀井孝氏は、なお破擦音であった可能性を説かれていた。とくに、「すずめしうしう」(『成蹊国文』3、昭45・3)では、すずめの鳴き声をもとに、そのことを詳しく説かれ、補説として次のように注意された。「かのヤソ会のロドリーゲスはその文典において、サ・ス・ソをうつすにローマ字としてはSの文字をかりるけれども、むしろ発音としては、それはçの方であるむねのことをわざわざ注意している。ところで、ロドリーゲスがサスソの音の発音のための、比較のひきあいにだすポルトガル語やカスティリヤ語では、もとçは破擦音であったのであるから、ロドリーゲスのしるすところをどううけとめるべきかは、われわれの興味をつよくそそらずにはおかない」丸山氏は、今回、ポルトガル語史などを参照し、この懸案の課題を慎重に検討して、先のような結論を導き出されたもの。子音交替については、山口佳紀「古代日本語の子音交替について――調音法の共通による場合――」(『訓点語と訓点資料』64、昭55・10)および、上代に限らず、「音韻変化」(=音韻の用法変化)一般について概観した岸田武夫「音韻変化の意義と分類」(『国文学言語と文芸』90、昭55・9)があった。前者は、調音法の共通による場合の子音交替、たとえばm―n交替などの整理と、そういう交替をひきおこす条件、ないし原因を考究しようとしたもの。これらの交替には、前後の子音と調音位置を接近させようとする力が働いているらしいという。いかにも、もっともな解釈であるが、このような場合、同じような条件下にありながら、一方で子音交替をおこさないものもある。それらとの関係について、何か考えてみる手がかりはないものであろうか。

三

このところ清濁に関する論考は、いつもかなりのものがあったのであるが、この期は、どういうわけかあまり目にふれなかった。わずかに、和語と漢語のそれぞれの場合における連濁の問題をあつかった次のようなものが目にふれただけである。遠藤邦基「非連濁の法則の消長とその意味――濁子音と鼻音との関係から――」(『国語国文』50―3、昭56・3)木田章義「その後の∧連濁とアクセント∨」(『梅花女子大学開学十五周年記念論文集』、昭55・3)前者は、濁音の連続を嫌う傾向と濁子音の音価とを関係づけて考えようとするもの。上代「ナゲク」「ツマゴヒ」のように、マナ行と濁音が連続している点に意味を認めて、当時、濁音が鼻音要素を伴っていなかったことの証としようとする点など、事情は九世紀以降も同じであるはずであるから、特に上代についてそれを言うためには、上代、鼻音の連続を嫌う傾向がとりわけ著しかったことなどをまず証する必要があるのではなかろうか。後者は、前稿「連濁とアクセント」(『国語国文』48―3、昭54・3)で和語を扱ったのに対して、今回は同じテーマで漢語、特には漢語幹サ変動詞の「～ス(スル)」「～ズ(ズル)」とアクセントとの関係を考えてみようとしたもの。この問題については、すでに奥村三雄氏に「生ズル(ショウ)と称スル(ショウ)――連濁の要因について――」(『岐阜大学国語国文学』3、昭39)という詳論があって、〔コ1〕型の語は絶対に濁らず、〔テ0〕型の語はたいてい濁るというアクセントとの相関性が認められる。しかしそれは、「語の熟合度、頻用度が、清濁の対立およびアクセントの両方に影響した」と解釈すべきであろうという。木田氏の今回の論は、『日本

国語大辞典』（小学館）の京都アクセントの記述のある一字二音節漢語の語幹サ変動詞二百余語をもとに、アクセントと連濁形の間に右のような対応のあることを再確認した上で、それぞれの型の成立過程と、連濁形との対応にみられるかたよりの意味を、深くほりさげてみようとしたものである。この他、字音の連濁について、柏谷嘉弘「山家本法華経の連濁」（『訓点語と訓点資料』64、昭55・10）があった。すでに論の多い呉音読資料の連濁についての考察。山家本法華経は、奥村三雄「字音の連濁について」（『国語国文』22―11、昭28・11）でも一部あつかわれた資料であるが、奥村氏が前接字去声調である場合に最も連濁が起りやすい（沼本克明「日本漢字音における連濁と声調の関係」『広島大学文学部紀要』31―1も同）としたのに対し、連濁例絶対数は前接字去声の場合が多いが、非連濁例を含めた百分比からすると上声の場合もかなり多いというような記述のちがいをみせるところもある。音便については、次のようなものがあった。(イ)岸田武夫『音便』に関する考察――(ハ)『音便』とはなにか――」（『梅花女子大学文学部紀要』16、昭55・12）、(ロ)大野透「音便――大野晋氏等の音便説を駁す――」（『国学院雑誌』81―7、昭55・7）(ハ)亀井孝「≪イ―キ(―)＞―イ(―)≫のいすとうりあ（ものがたり）」（『国語国文』49―1、昭55・1）、(ニ)出雲朝子「再びラ行四段活用動詞の音便形について」（『青山学院女子短大紀要』34、昭55・11）、(ホ)彦坂佳宜「近世尾張方言のサ行イ音便――音便化の条件と位相と――」（『岩手大学教育学部研究年報』40―1、昭55・10）(イ)は、副題にもあるように、音韻変化のどの範囲を「音便」とすべきか、他とどのように区別されるべきかを考える。(ロ)は、音便に関する広範な問題に一つ一つ見解を述べたもので、先行の説についてきびしい批判が聞かれる。(ハ)は、イ音便の形成と上代特殊仮名遣を関連づけて考えようとしたきわめて意欲的な論。音便は一般には、中古以降にあらたに発生した音韻現象ということで、特殊仮名遣との関連を特に考慮しないのが普通であるが、本論は、キ（甲）キ（乙）の混乱と、イ音便化への胎動は交錯するのではないかと考える。すなわち、キ（甲）がイへむかって動きはじめ、そのあとをキ（乙）がキ（甲）へとおいかけるという音韻の動きを考える。しかし、キ（甲）＞イの音則は、音則としてはその後たちがれになる。そののちにキ（乙）とキ（甲）とが合流したために二段活用の連用形は音便の洗礼を受けることがなかったのではないかという。語源的にキ（乙）という皮肉な音を含み持つツイタチ、ツゴモリ、ツユクサなどの語をもとに右のような図式を描き出してみせるのであるが、しかし、四段活用と二段活用の音便化への差異を、音則のたちがれという音次元の問題だけで説きさることができるであろうかという異論はやはりあり得るであろう。その前に二段活用というものの個有の事情のありなしについてやはり尋ねておく必要があろうからである。本論は、また〝音便拍〟なるものの成立を唱える。たしかに言われてみれば、音便は、単なる音の損傷それだけのものではない。(ニ)は、かつて出雲氏が唱え、のちに大塚光信氏などの批判のあったラ行四段動詞の音便についての再検証、ラ行四段動詞の口頭語における音便化の完成は、かなりおくれるのではないかというのが出雲氏の主張であるが、今回も平家物語や幸若、抄物などの調査にもとづいて、身分、階層、態度などで音便と原形がつかいわけられる状態に十五世紀の半ばなおあったのではないかという。(ホ)は、筆者の一連の近世尾張方言の研究の一端をなすもの。中世末期の中央語よりもまだ盛んで

あったらしいふしがあるという。この他、音便については、小松英雄『日本語の世界7　日本語の音韻』（中央公論社、昭56・1）の第六章に「音便のはたらき」として、音便を機能的な面からとらえ、「蝶つがいでつないだ」ような働きをするものとして解説してみせるところがあった。「音便機能考」（『国語学』101、昭50・6）で詳細に説かれたものである。

四

『日本の言語学2　音韻』（大修館、昭55）『論集日本語研究2　アクセント』（有精堂、昭55）がともども、これまでのアクセントについての主要な論文を集成した。後者の解説で、徳川宗賢氏が、アクセント研究は、方言研究、歴史的研究の両面にわたって、「日本語の全研究分野の中でも、もっともバランスのとれた形で発展している」と評したが、その一翼の歴史的研究の方に、この期にもまたいくつかの重要な成果が加えられた。まず、奥村三雄『平曲譜本の研究』（『桜楓社、昭56・5）がいよいよ一書としてまとめられた。また、渥美かをる・奥村三雄編『平家正節の研究』（大学堂書店、昭55・1）もこの年度に出た。奥村三雄『平曲譜本の研究』は、平曲譜本類を博捜整理した第一編平曲譜本考、尾崎家本平家正節を主資料に、アクセントについての考察を中心にした第二編平曲譜本の国語学的研究、および平家物語研究と平曲譜本の三編からなる。第二編が本書の中心になるが、アクセント史資料として、平曲譜本は、質量ともに極めて豊富であること、諸語形が話線的な関係でとらえられること、など有利な特性がいろいろあり、これによって中世末近世初期ごろのアクセントの再構、それによる通時的考察などがなされる。特に、譜本の特性を活用して、活用語の諸形や付属語の類について詳細に説くところがあり、また、各種注記や音曲と詞章の関係などにも鋭い考察がなされている。中世初期のアクセントについての金田一春彦『四座講式の研究』（三省堂、昭39）とともに、この方面の基本的な図書になるであろう。詳細は、いずれなされるであろう本格的な書評にゆずる。『平家正節の研究』については、すでに、秋永一枝氏（『国語学』126、昭56・9）、添田建治郎氏（『語文研究』50、昭55・12）に詳しい書評紹介がある。また、秋永一枝『古今和歌集声点本の研究　研究篇上』（校倉書房、昭55・2）があった。前著の『資料篇』（昭47）『索引篇』（昭49）につづいての『研究篇』である。今回はページ数の関係で、第一篇体言のアクセント（字音語を含む）をまとめて、上篇としたものという。手がたく着実な研究で、『研究篇』の早期の完結がのぞまれる。アクセントの研究ではないが、これら古今集の注釈書などにつけられた「よむ」注記について考察した遠藤邦基「『読み癖』注記に対する一解釈――ハ行転呼音に関して――」（叙説、昭55・10）があった。一般には語中尾にハ行音がくることの方が例外的な中世期に、わざわざ「ワトヨム」と注記した意図をさぐって、当時の和歌がその時代の音韻どおりには読まれなかった、たとえばハ行についていえば、転呼音化してよまないというような、一種の歴史的伝統的ともいえる特殊な「よみ」の方法があったのではないかという、たいへん大胆な興味深い推定をのべる。声点注記の場合、その「意図」を那辺に想定すればよいのかというのは、たいへんむつかしい問題であるが、右記遠藤氏の引用する横井金男『古今伝授の史的研究』「歌学伝授の要素の一つは勅撰集の読みと語句の解釈を伝えることであるが、読

みを伝えたあと、その伝授に用いた証本の声点を書き写すのが、伝授に伴なう一つの方式で、これを『てんしゃううつし』と呼んでいたのである。」というあたりに落着くとすれば、定家の歌論書『僻案抄』などとの関連がさしあたり気になってくる。そこでとりあげ注釈を加えている箇所と声点注記部分との間に何らかの関連が認められるとすれば、これをもとにして声点注記の層別などが考えられないであろうかなどと思ったりもする。さて、この他、アクセントについては、以前になされた比較的重要な提言について、再検討を試みようとしたものがいくつかあった。S・R・ラムゼイ「日本語のアクセントの歴史的変化」（『月刊言語』9―2、昭55・2）は、平声・上声の音価、甲種・乙種の歴史的先後について、通説と全く逆の案を提出するが、これについては、早田輝洋氏に早速反論があった。「平安末期京畿方言の声点とその音価――ラムゼイ説の帰結する所――」（『九大言語学研究室報告』1、昭55・3）金田一春彦「味噌よりは新しく茶よりは古い――アクセントから見た日本祖語と孚音語――」（『月刊言語』9―4、昭55・4）は、服部四郎「日本祖語について」（言語誌上に連載）の批判に答えたもの。日本本土諸方言のアクセントは、平安時代の京都方言アクセントからわかれ出たという年来の主張を再述し、あわせて、漢語アクセントによって、その時期は「アクセントから見た日本祖語の時代は、味噌の普及よりは新しく、茶の普及よりは古かったのではないか」という。漢語アクセントによる推定には、早く奥村三雄氏に論（「東西アクセント分離の時期」『国語国文』24―12、昭30・12）があり、そこでも言及があるが、今回このために新たに収集確認した各地の漢語アクセント資料は、それとしてまた貴重なものとなろう。蜂矢真郷「一音節被覆形―露出形のアクセント――金田一法則の例外について――」（『万葉』107、昭56・6）は、副題にみるように、アクセントについての高起・低起に関する式保存の法則、いわゆる金田一法則を、被覆形露出形の対応の中に検証しようとしたもの。二音以上の被覆露出には金田一法則はあてはまるが、一音節のものには例外が認められ、また、例外が生じうる理由が一音節のものにはあるという。この「法則」の例外について、金田一氏自身もふれるところがないではないが（『国語学』93）、この場合、その挙例が、「この一群」とくくりうるだけの説得力をもち得るかどうか。

五

漢字音については、例年、この分野の主要な柱の一つとして活況を呈するのであるが、この年度も例にもれず、中でも、呉音声調をめぐる高松政雄氏の活躍が目をひいた。高松氏は、呉音声調をめぐる問題として、(1)韻書と逆対応しないもの、(2)両点字、(3)上声点、その一部としての上声専用字の三を重要なものとして自らに課す。一字二声調のものの多いのが呉音の一つの特色とされるが、(2)はその点を問題にしたもので、(1)ともかかわる。(3)は、先年、沼本克明氏によって再論され注目を集めた呉音三声説（平去入）からすれば、呉音上声はやはり注意を要することになる。次の諸論は、すべてこのような観点からなされたものである。「呉音声調史上の一齣――色葉字類抄の声点――」（『岐阜大学教育学部研究報告人文科学』28、昭55・3）「色葉字類抄の声点」（『訓点語と訓点資料』65、昭55・11）「法華経読誦音中の両点字――山家本に依る考察――」（『岐阜大学国語国文学』14、昭55・2）「呉音声点における問題点――両点字と上声専

用字」（『国語国文』10―1、昭56・1）「呉音声点の性格」（『国語国文』49―3、昭55・3）「呉音上声点」（『国語国文』50―8、昭56・8）ある時代以降、学問的な反省が加えられて、呉音がそれとしてあらたに作られていく面があるというのは、これまでにもよく説かれてきたところであるが、そういうことを含めて呉音の変転を具体的な資料について裏づけていこうというところにこれらの基本的な方向があるとみてよいのであろう。林史典「日本字音における明母、泥母等の子音について――法華経読誦音の成立と伝承に関する問題をめぐって――」（『馬淵和夫博士退官記念国語学論集』大修館、昭56・7）は、仏典に用いられた呉音系の字音は、漢音伝来を機にそれとの対比をもとに本来の純粋性を保つべく体系化することも可能であったはずであるが、どういうわけかほとんど無批判に過去の伝統を踏襲するだけに終った。したがって、伝統的読誦音の形成当初から漢音系の混入を許すことになり、呉音のありかたをいよいよ複雑にしたとする。小川栄一「『法華経随音句』の字音」（『訓点語と訓点資料』64、昭55・10）は、その伝統的読誦音の錯乱、誤謬を韻学の立場から補正しようとしたものの一つに『法華経随音句』のあったことをあげ、その業を細かく分析する。当時の読誦音の実態や、韻学を考える上で、たいへん興味深く、今後の研究の進展が期待される。沼本克明「観智院本類聚名義抄和音分韻表」（『鎌倉時代語研究』3、昭55・3）は、観智院本類聚名義抄「和音」にも、やはり、非呉音系字音の混入などの問題はあるが、量的に豊富なこと、連音上の変化を受けていないことなどに意味を認めて、呉音系字音究明のための資料として、その分韻表を作成したという。林史典「呉音系字音における舌内入声音のかな表記について」（『国語学』122、昭55・9）は、日本字音における舌内入声の開音節化と表記との関連を考えたもの。多くの法華経読誦音資料を駆使して手がたく論じている。その他、漢字音に関って多くの論考がみられたが、一つまとまりとして示せそうにないので、以下そのうちのいくつかを順次並べて紹介することにする。中世禅林の字音の声点や声調等についての学問的知識の程度を問うたものに湯沢質幸「室町期禅林における声点――百衲襖を中心として――」（『山形大学紀要人文科学』9―4、昭56・1）がある。湯沢氏は、先年、広本節用集の平声重・軽の位置が実は韻書の下平、上平の分巻に対応しているということを示されたが、標題の文献でも軽・重注記と声点加点位置とが有意的な対応を示さないという。高松政雄「慣用音二題『打ダ』『話ワ』」（『佐藤茂教授退官記念論集国語学』、桜楓社、昭55・10）は、慣用音という扱いのあいまいなこの音について、その素性を確かめようという高松氏年来の課題の一つの実践例。沼本克明「フッキ（富貴）をめぐって」（『鎌倉時代語研究』4、昭56・5）この形については、山田忠雄『近代国語辞書の歩み　上』（226P、三省堂、昭56・7）にも言及があった。小林芳規「漢書楊雄伝天暦二年点における一音節字音の長音化について」（『国語史への道　上』、三省堂、昭56・6）古代語における長音化例の見える文献として引用されることの多い標題の文献について、あらためて検討しなおしたもの。長音化とアクセントとはこの文献の場合関係がはっきりしないという。

六

この他に、合拗音が日本語音韻体系の中に一時的にしろ定着したについては、それを受け入れるだけの素地が日本語の中にあったこ

とを説く小倉肇「合拗音の生成過程について」（『国語学』124、昭56・3）や、ア列音に後続するフの長音化、非長音化を問題にした出雲朝子「『仰ぐ』『倒る』等の語形について」（『馬淵和夫博士退官記念国語学論集』、大修館、昭56・7）など興味深いものがあったのであるが、比較的研究の集った部分を好んでとりあげようとすれば右のようになり、いくつかのものについてはおさめる場所がなくなってしまうという結果になってしまった。また、右の、上代語、清濁、音便、アクセント、字音史というそれぞれの部類の中にあっても、遂にふれ得なかったものがいくつかあり、これらの不行届についてはただおわびするしかない。総じて、ここ数年来の傾向の上にのりながら、それぞれの方面で、著実な研究の進展がみられた。特に上代語における森博達氏、高山倫明氏などの新たな視点の呈示などに印象深いものがあった。

——九州大学助教授——